

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成25年2月1日(第1225号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



絵 白澤 恵舟

「過疎 I」

常置委員会で初の試み

土木・労務・経営 三委員会合同で秋田県と意見交換



秋田県建設業協会は常置委員会の土木(佐藤清忠委員長)、労務(武田鋭彦委員長)、経営(八重樫學委員長)の三委員会合同による秋田県建設部との意見交換会を12月20日、秋田ビューホテルで開催した。

今回の意見交換会は、常置委員会における初の試みで、24年度における各委員会で業界の諸問題を協議する中、

秋田県との意見交換を望む声が多く挙げられたことから、三委員会相互の合意により、委員会毎のテーマで意見を集約・整理の上、秋田県建設部へ提示して実現した。

意見交換会には協会常置委員が26名、秋田県建設部からは塚田善也建設政策課長、石山良英技術管理課長をはじめ9名の職員が出席。各委員会から

の質疑、要望について、意見を交わした。

会の冒頭、委員会を代表して挨拶した八重樫學経営委員長は県建設部からの出席に謝辞を述べ、「最近いろんな所で私ども建設業者と発注主体であります県の方とミスマッチと言いますか、コミュニケーション不足みたいなところを時々聞いております」と近況に触れ、「コンクリートから人へ」といった時勢の中で希薄になっている受発注者間のコミュニケーション、県民の方々に安全でいいものを造るという共通認識について、この機会に話ができたらよいと締めくくった。

意見交換では、労務委員会から▽積算▽労務費▽労働災害防止への要望提案、土木委員会からは▽工事監督・設計変更・協議等▽総合評価落札方式について。経営委員会からは▽適正な公共事業予算の確保と地域バランス▽各地域振興局発注について▽事後公表の拡大▽低入札調査基準価格と最低制限価格の引き上げについてを提示し、県建設部からの見解、回答をいただいた。また、その他として設計書の取扱い、電子入札における諸問題など個別の案件について率直な意見を交わした。

県建設交通部と建築関係企業が懇談

秋田県建設業協会は1月21日、秋田ビューホテルを会場に秋田県建設部と建築関係企業との意見交換会を開催し、企業45社が参加した。

同懇談会は、県協会建築委員会(伊藤久一委員長)が平成24年度活動計画に掲げていたもので、今回で3回目

となる。

当日、県建設部からは、塚田建設政策課長、貝田政策課政策監、石山技術管理課長、中村技術管理課技術管理官、高橋建築住宅課長、小玉営繕課長、土田建設政策課副主幹、伊藤建築住宅課主幹、高橋営繕課主幹の9名が参加

し、企業参加者と意見を交わした。

始めに、建築委員会を中心に取りまとめた20項目にわたる提出意見・要望事項について建設部から回答があり、続いて意見交換に移った。

(右頁)

秋田・鉄 路の情景

Vol.
4

「ハイブリッド・トレイン」

JR東日本「リゾートしらかみ」
青池編成

文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、
ベンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー
企画等



クルマの世界ではハイブリッド車も珍しくなくなってきたが、鉄道の世界ではこのごろようやく、ハイブリッドの走行システムを取り入れた車両が登場し始めたばかりだ。

ただし、クルマと鉄道車両では同じハイブリッドという呼び名でも構造は少し異なる。

クルマの場合はエンジンとモーターを交互に使分けたりあるいは補完し合って駆動力にしているが、鉄道車両では、まずディーゼルエンジンで発電機を回し、その電力を蓄電池に貯め、あるいは直接モーターに流し、その発電機や蓄電池の電力でモーターを回して駆動力にしているのである。エンジンの回転を直接的には駆動力に使わない点がクルマの場合と異なる。

電気で走っている鉄道車両なのだから、考えようによっては真正正銘の「電車」と呼ぶこともできるのではないだろうか。この動力方式そのものは決して目新しいものではなく、「電気式自動車」の名で昭和初期から存在していた。ただ、車体重量が重くなりがちなのが難点で、日本の軟弱なローカル線には不向きということで定着は見なかったようである。

時代は下って、重量を抑えた機器も開発されるようになり、また、低燃費・空気汚染抑制・騒音抑制というような社会的要求が高まってきたこともあり、未電化区間列車の新時代走行システムとして、かつての「電気式自動車」の再登場に至ったのである。

我々の身近であれば、JR奥羽本線・五能線を走る観光列車「リゾートしらかみ」青池編成が、国内の最新型のハイブリッド・トレインになる。従来型に比べ、10%の燃費低減、60%の排気中窒素酸化物の低減、停車時と発車時の20~30%の騒音低減を見込んだ設計がなされているという。ざっくりとした表現をすれば、「環境に優しい列車」と言うことも出来るだろう。「リゾートしらかみ」は現在3編成で運行されているが、ぜひ青池編成に乗ってハイブリッド・トレインなるものを体感していただきたいものである。

[意見交換・要望事項]

1. 入札・契約関係

- ▽“地域振興局管内に主たる営業所”を要件とする工事の金額の拡大、総合評価落札方式における“主たる営業所の所在”の点数拡大。
- ▽冬季施工を回避する為の早期発注。
- ▽建築物解体の発注について。

2. 設計・積算関係

- ▽小規模な工事範囲、改修工事における既存建物など実態に合った設計・積算について。
- ▽工事内容に合わせた工期設定、現場経費率について。
- ▽施工条件の付く工事における労務関係単価の実情について。
- ▽設計図書等の数量公開について。
- ▽入札における積算期間の設定。
- ▽建築積算士の活用について

3. 施工関係

- ▽施工日数指定工事の監督員対応、質疑提案に対する回答期日について。
- ▽書類の削減化について
- ▽管内工事の受注機会継続について
- ▽VE提案、施工業者の設計施工について
- ▽一般住宅の耐震診断、補強の補助金等の拡大
- ▽太陽光発電、風力発電等の設置拡大に向けた補助



(財)建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

不思議な岩の話

永井登志樹

日本ジオパークに認定されている男鹿半島の南海岸(南磯)には、前にこの随想欄で取り上げた椿の白岩のほかにも、奇岩怪石が数多く点在している。それらの岩石は地学的に興味深いだけでなく、伝説が残されるなどして地域の信仰や伝承と関わっているものも多い。小浜海岸にある竜巻岩(龍口岩)もそのひとつだ。

この岩は海岸に沿って走る県道のすぐ脇にあるのだが、先を急ぐほとんどのドライバーは見過ごしてしまう。私はここを通るたびに、この不思議な形状をした岩を観光客が気づくことなく通り過ぎてしまうのはもったいないな…と思う。

200年前にここを通った旅の文人・菅江真澄は、この岩を「龍の口」という名の通り、まるで生きていて龍のように見える」と記し、迫力ある絵を描いている(お見せできないのが残念だが、素晴らしい絵だ)。確かに天に昇っていく龍の口に見えないこともないが、ワニ(鰐)が口を開けているようにも見える。それで鰐岩と呼ぶ人もいるが、ここから西へ200メートルほど行った小浜集落内に本来の鰐口岩があるのでちょっとややこしくなる。ただし、道路に覆い被さるように口を開けていた元祖鰐口岩は、崩落の危険あり、ということで、7年ほど前に工事が行われ以前の姿ではなくなってしまったのが惜しまれる。

岩の形を見ると、鰐口と龍口、どちらでもいいように思えてくるのだが、地元の人たちは「竜巻岩」と呼んでいるようだ。その理由というのが変わっていて、なんでも「強い竜巻がこの岩を巻き上げてここまで運んできた」ということらしい。それが単なる想像なのか、実際に見た人がいてその伝聞からなのかは、よくわからない。

ただ県道から海岸に下りてよく見ると、この岩は地表とつながっておらず、岩浜の岩盤に不安定に乗っているだけなのかわかる。陸側から岩石が転げ落ちてくるような地形ではないので、どこからか運ばれてきたとしても不自然ではない気がする。竜巻ではなく、大きな津波が運んだ津波石という可能性や、竜巻岩を取り囲んでいた地層が浸食されて岩だけが残った、ということも考えられるのだが、私の乏しい知識では確かな証拠を見いだすことはできないので想像をめぐらせるだけだ。

この竜巻岩のように、どこから運ばれてきた(飛んできた)といわれている石や岩は、実は日本全国にある。秋田県内では、男鹿半島・大潟に続いて昨年9月に日本ジオパークに認定された八峰町の八峰自神ジオパークにも、超常現象?で運ばれたといわれている岩があるので、紹介してみたい。

この不思議な岩の存在を知ったのは、4年前の夏に八峰町の生涯学習教室で講話をするために町の郷土資料を調べていて、「オカモイ崎」と題した次のような記述を見つけたことからだった。

「明治8、9年の頃の秋、南東の風強く吹き、それが西北西よりの風にかわり、海は大荒れ大浪となりました。夜の12時過ぎの

頃、人家を洗う雨の音高く、実に物凄い有様となりました。小入川の弥兵衛という老人、その物音に起きたが、風雨のため外に出られず、戸のすき間から外を見たところ、真暗闇の沖の方から、大きな光玉が飛んで来たので、これはと驚き、なおも戸のすき間から見て居たところ、その光玉が、物凄い音と共に、この崎へ落ちて光が消えたのです。

弥兵衛老、不思議に思い、翌朝村中の人々にその話を知らせ、皆揃って、光の落ちた場所へ行って見たところ、今まで無かった大岩が岩上にあるので、皆不思議に思った。占者にみってもらったら、「これは北海道のオカモイさまの分身なり」といわれ、明治14年に(中略)立派なお宮を建てて、御神威神社としてお祭りをしたのです。それから岩館は鯨の大漁が続いたといえます(郷土誌資料『八森』43号「岩館の今昔」より/八森町教育委員会発行)

『八森町史』にも同じような記述があって、要約すると「明治10年10月6日の夜、海から妖光が飛んできて大音響を立てて岩浜にぶつかった。翌朝見てみると大きな岩塊が座していた。以来、鯨漁が年々盛んになったことから、これは北海道から鯨の神オカモイさま(お神威さま)がおでましになったのだ、ということになって、お宮を建てて祀った…」というようなことが書いてあった。

オカモイ、オカモイとはアイヌ語でカムイ、神のことであって、日本語の「カミ」と同様、「霊」や「自然」の意もあるといってもいいだろう。いずれにしても、明治の初めころにどこからか大岩塊が飛んできて海岸に落下、それ以来鯨の大漁となり、岩を神として祀った、というのが話の大筋だ。

この大岩(オカモイさま、お神威さま)のある場所は八峰町の北部、岩館漁港が近い小入川集落前の海岸。ここには菅江真澄が絵などで記録している「立岩」があり、私も何度か訪れていたところだったので、資料を読んで早速訪ねてみた。

岩塊に近づいてみると、確かに下の岩盤とはつながっていない。支えているのは3か所で、微妙なバランスで岩盤の上に乗っかっているように見える。下の岩盤とは岩石の種類が異なるので、実際に見てみると郷土誌(史)の記述通り、光を放った大岩がここに飛んできたという話が信憑性を帯びてくる。

岩塊は砂礫岩(火山礫凝灰岩)だろうか。目撃証言のような火の玉だとしたら、隕石ということも考えられるが、この岩石ではあり得ない。男鹿の竜巻岩と同じく、津波が運んだ津波石の可能性も捨てきれないが…。

岩の上には小さな石祠が祀られているほか、別に小入川集落内にオカモイさまのお宮(神社)もあり、かつてお祭りの日には大変賑わったということだ。石祠のある岩の背後に、同じような形の岩があるが、これはもともとひとつの岩塊だったものが、割れて2つになったものと思われる。見れば見るほど不思議な岩である。

八森から岩館にかけての旧八森町の周辺海域は、江戸から明治期にかけて鯨の好漁場であった。だが、かつての鯨漁のにぎわいと、それにちなむオカモイさまのいわれを知る人も、今では少ないという。



竜巻岩(男鹿市小浜海岸)



オカモイさま(八峰町小入川海岸)